藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

浮世絵館だより

2020年
12月
Vol.13

もくじ

展示紹介
藤沢トラフィック－浮世絵の道から鉄道と道路の記憶－ …… P1
市制施行頃の藤沢の交通／「人力車」の風景 …… P2
旅行ブームが促した旅行案内図の多様なデザイン …… P4
同時開催「市制施行80周年記念藤沢トラフィック　鉄道のおもいで」／
浮世絵こぼれ話10 …… P5
二代目オニカゲ学芸員のページ／うきよ場なれ／編集後記…… P6

市制施行80周年記念

藤沢トラフィック

－浮世絵の道から鉄道と道路の記憶－

会期　2020年12月22日(火)～2021年2月14日(日)

図1　歌川広重「東海道五十三次之内　藤沢」

図2　「藤澤湘南荘分譲地広告」昭和10年（1935）頃

本年市制施行80周年を迎えた藤沢市は、江戸時代以前から東海道の交通の要衝として長い歴史があります。江戸時代には東海道の江戸・日本橋から6番目の宿場として、近隣からの道路が集中する商業・観光地として栄え、明治維新後もその繁栄は衰えることはありませんでした。明治20年（1887）、横浜－国府津間に鉄道が開通し、藤沢停車場が鵠沼との境付近に開設されると、東海道沿いにあった街の中心は徐々に南へ移動し、同時期の製糸業の隆盛や海水浴場の登場で、人の流れは大きく変わっていきます。

図1は幕末の大鋸橋（現遊行寺橋）界隈。橋上を行く大山詣（まい）りの一行と、江の島一ノ鳥居をくぐる江の島詣（もうで）の旅人の行き来が描かれています。図2は昭和10年（1935）頃の藤沢・伊勢山の分譲地広告。左下の橋は藤沢本町の小田急線に架かる東海道の伊勢山橋です。図は、国鉄線（JR東海道線）、小田急線、国道等を描き、緑豊かで交通至便な土地であることを示しています。

市制施行頃の藤沢の交通

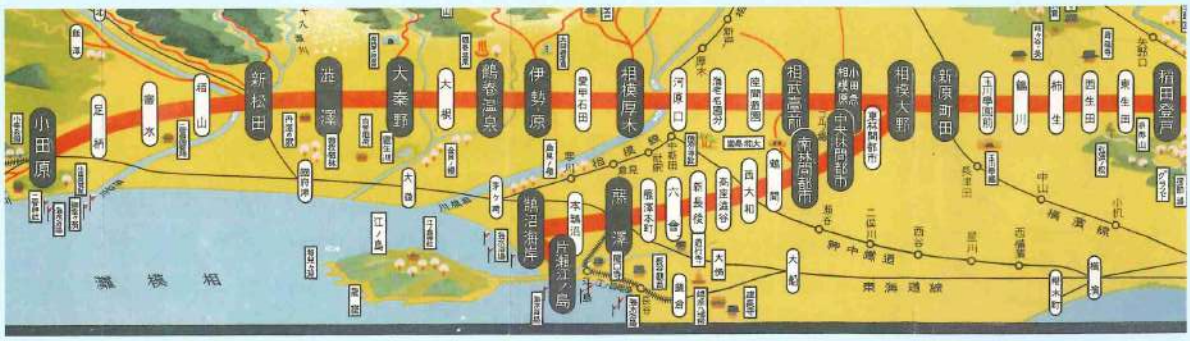


図3　小田急電鉄株式会社「沿線案内」(一部)

明治41年(1908)、藤沢大坂町・鵠沼村・明治村が合併して藤沢町が誕生します。そして、明治43年(1910)には江之島電気鉄道の藤沢～鎌倉間が全通し、関東大震災後の昭和4年(1929)には小田原急行鉄道江ノ島線が開通して、観光と結びついた藤沢周辺の交通網は飛躍的に整備されました。

道路交通では、関東大震災後の道路整備の進展と相まって、各地にバス会社が起こり、昭和6年(1931)に江之島自動車・片瀬自動車商会・鵠沼自動車が合併して、藤沢自動車が設立しました。同社は藤沢近辺にとどまらず、厚木・津久井方面まで規模を拡大しました。また昭和19年(1944)には伊勢原自動車、東海道乗合自動車と合併し、神奈川中央乗合自動車(現神奈川中央交通㈱)が設立しました。

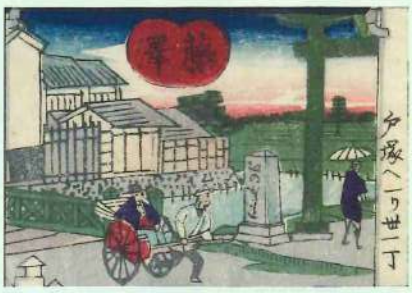
図3は昭和16年(1941)当時の小田急電鉄の沿線図です。赤く太い線が小田急江ノ島線。新長後は現在の長後駅のことです。「海水浴場」を示す旗のサインが目立ち、海水浴ブームへの期待が窺えます。

図4は、藤沢バスの「沿線案内」。こちらも観光と結びついて、広範囲の交通網が見られます。タイトルの左にある「新進」は理研(合成)清酒の銘柄で、城南の大和醸造(現メルシャン)で醸造していました。

図4　藤沢バス「沿線案内」昭和10年(1935)頃

「人力車」の風景

江戸時代、東海道藤沢宿は江の島詣、大山詣りの入り口の宿場として賑わいましたが、明治になって鉄道が敷かれる時代となっても、参詣者の宿はかつての宿場にあり、遊行寺橋付近は、宿場から江の島、鎌倉へ向かう人力車のステーションとなっていました。



三代歌川広重「新撰東海道五十三駅電信明細双禄」明治7年（1874）発行より藤沢のマス絵

江戸時代の街道では輸送手段としての車輪の使用を制限されていましたが、明治になると緩和され、駕籠より速く、馬に乗るよりも安かったため人気の交通手段になり、文明開化の象徴的な存在でもありました。江戸時代の江の島詣は鎌倉方面に寄ってから海岸沿いに江の島へ向かうコースが多かったようですが、東海道線の開通後は、藤沢駅から人力車で向かうことが多くなりました。片瀬海岸に住んで、車夫の若者を主人公とした小説『江島道（えのしまみち）』（明治34年（1901）発行）を著した江見（えみ）水蔭（すいいん）は、同書に「（夏季には、藤沢停車場から）江の島への遊客、片瀬への海水浴者、二百何台の腕車（くるま）が引足らぬので、溢れては片瀬川の早船に何百杯の上下。車夫が一年の生活を取るのは、此時（このとき）…」と記しています。

江見水蔭『江島道』表紙

しかし、その隆盛も永くは続かず、明治35年（1902）に藤沢－片瀬（現江ノ島）間に参詣電車としての江之島電気鉄道（のち江ノ島電鉄）が開通すると、人力車の利用は次第に減っていきました。

横浜写真「TOTSUKA TOKAIDO」（明治初期）

横浜写真「題名不詳（江の島と人力車）」（明治初期）

旅行ブームが促した旅行案内図の多様なデザイン

図1　吉田初三郎「小田原急行鉄道沿線名所図絵」昭和2年（1927）

交通機関の整備に伴い、大正から昭和にかけて旅行ブームが起こり、日本各地で観光地開発が進められました。すでに有名であった名所だけでなく、新たに打ち出した新名所や、宿泊施設が次々と建設され、旅行先の選択肢が格段に広がりました。

旅行ブームで活用されたのが、知らない土地を分かりやすく楽しく視覚化した鳥瞰図（ちょうかんず）です。鳥瞰図とは、ある一定の角度からの風景や事物を見下ろして描いた絵のことで、風景画の構図や地図に使われてきました。鳥の目線から見下ろす、「Bird's eye view」の訳語で、「パノラマ図」と呼ばれることもあり、都市案内図に適した形式として重宝されました。地図と観光案内図を織り交ぜた鳥瞰図は全国各地で制作されますが、中でも吉田初三郎（1884−1955）の鳥瞰図は質・量ともに鳥瞰図画家の中でも群を抜いています。

図1は、小田原急行鉄道沿線を中心に、周辺の路線情報や名所が細かく描かれています。遠景に視線を移すと、北は函館、南は下関と路線が繋がっており、広範囲の地域を図中に凝縮させていることが分かります。実際に、これほどまでの範囲を一望することはできませんが、交通網が整備されたことで、移動手段が主に徒歩であった時代と比べて、感覚的に近くなり、行きやすくなったことを示しているのかもしれません。

初三郎の鳥瞰図にならい、様々な鳥瞰図が制作されましたが、影響は観光案内図だけにとどまりません。図2の挿絵にも鳥瞰図ブームを意識したかのような地図が使われています。大船駅を拠点に鎌倉・湘南の駅や名所が俯瞰的に描かれています。よく見ると、相模湾の海の色が富士山型の枠と合わさり、鎌倉・湘南地域の地図であると同時に、富士山も浮かび上がる二重のイメージがかけられています。当時の庶民の身近なパッケージデザインでしたが、地図部分だけでなく、文字や配色も非常に凝ったデザインになっています。

これら2点は、交通が整備されたことにより、旅行が定着し、旅行を宣伝・楽しむための広告（鳥瞰図・弁当の掛け紙）にも大きな効果をもたらしたことがよく分かる好例です。

図2　大船軒掛け紙（サンドウキッチ）
昭和6年（1931）

同時開催

「市制施行80周年記念 藤沢トラフィック 鉄道のおもいで」

会　期：12月22日（火）～2021年2月14日（日）
休室日：第2月曜日（12月29日～1月4日は休室）
会　場：藤沢市民ギャラリー常設展示室
（JR藤沢駅南口ODAKYU湘南GATE6階）
時　間：平日/10時～20時　土日祝/10時～18時
入場料：無料

藤澤浮世絵館との同時開催で、それぞれ異なる資料を展示します。P4の吉田初三郎「小田原急行鉄道沿線名所図絵」・大船軒掛け紙（サンドウヰッチ）は藤沢市民ギャラリー常設展示室にて展示します。

浮世絵こぼれ話 10

2021年の干支は「丑（牛）」です。江の島を題材にした浮世絵には、たびたび牛が登場します。図1は背景に江の島と、富士山のふもとに朝日がのぼる様子を描いたお目出たい図柄です。旅姿の女性を乗せた牛が、波打ち際の砂浜を進んでいます。描かれた女性は、江の島詣を終えて、七里ガ浜を通って鎌倉へと向かうところでしょうか。その傍らには地元の子どもたちが群がっている様子も見えます。その中で、正面を見据えるような牛の表情が印象的な一枚です。このように旅人を牛に乗せて運ぶことは実際にも行われていたようで、図2の戯作者・十返舎一九（じっぺんしゃいっく）の絵草紙「箱根山七温泉 江之島鎌倉廻 金草鞋（はこねやましちおんせん えのしまかまくらめぐりかねのわらじ）」の「腰越」の段には「江の島をいでゝ、腰越の漁師町をうちすぎて、七里の浜つたひ、むかふに安房上総の山々を見わたし、景色よし。されども、砂道にて難儀なり。此間、牛にのりてよし。」と記されています。

図1　歌川国芳「山海名産尽　相模ノ堅魚」

（画中の狂歌）
たいくつさ　あともどりする
すなみちを　のりたるうしの
よだれだらだら

図2「箱根山七温泉 江之島鎌倉廻 金草鞋」の「腰越」

二代目オニカゲ学芸員のページ②

「浮世絵の見方 いま・むかし」

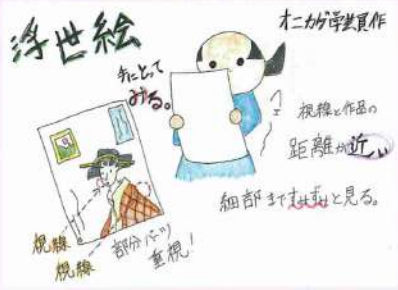
今回は二代目オニカゲ学芸員が尊敬する研究者の一人、杉浦日向子（すぎうら ひなこ）氏（1958-2005）の浮世絵の見方をご紹介！　杉浦氏といえば、葛飾北斎の娘・お栄（えい）を題材にした漫画『百日紅（さるすべり）』が有名ですが、同時に江戸の風俗研究家としても活躍しました。現代に通じる精神や共感を交えながら読み解く独特な時代考証は、まさに目からウロコ！！　の連続です。

杉浦氏の著作『江戸へようこそ』（ちくま文庫・1989年）によると、そもそも浮世絵は手に取って見る媒体であるので今日の美術館のように額に入れた鑑賞は適していないとのこと（！！）杉浦氏は、浮世絵とそれ以外の絵画（掛軸など壁に掛けて見る型）を便宜上「一般絵画」と呼び、「絵と鑑賞者の距離」に着目しています。

一般絵画の場合、壁に掛ける前提で制作するため、絵と鑑賞者に一定の距離があります。絵全体を見ることを想定して、描き手は奥行やボリューム、写実を意識して描くため、鑑賞もそれにのっとった見方に重点が置かれます。

一方、浮世絵は当時手に取って見るのが当たり前でした。そのため鑑賞方法は一般絵画と異なり、細部を順に追って見ることに重きを置きます。手に取って見る鑑賞者の視野に合わせると、全体像よりも細部を重視した細やかな表現が増えていくのですが、今日のように浮世絵を額に入れ一般絵画のように扱うと、鑑賞時の細部への注視が薄れてしまうというのです。

現在、保存の観点からも浮世絵を額に入れての展示は致し方ありませんが、少しでも当時の雰囲気が伝わる展示ができるよう、工夫して頑張ります！！



編集後記

藤澤浮世絵館では、浮世絵を郷土の歴史資料としてご覧いただくとともに、絵図や地図など多様な資料を展示しています。今回の市制施行80周年を記念する展示では、浮世絵に描かれた道をたどりながら、近代の人力車、汽車、電車の姿、そして自動車社会へとつづく藤沢市の交通の歴史の断片を紹介しました。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階
【電話】0466-33-0111　【FAX】0466-30-1817
【開館時間】10:00〜19:00（入館は18:30まで）
【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）
※その他、展示替えのために休館日がございます
【HP】 藤沢市藤澤浮世絵館 で検索

facebook：藤澤浮世絵館 公式アカウント
☆このマークが目印です。「いいね！」お願いします。